からすま メンタルクリニック

リワーク からすま

精神科における神経発達症の診療

2026年10月4日

阿部　能成
杉本医院からすまメンタルクリニック 副院長
京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学 客員講師
慶應義塾大学医学部医科学研究連携推進センター 研究員

利益相反(COI)開示

発表者：阿部　能成

発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。

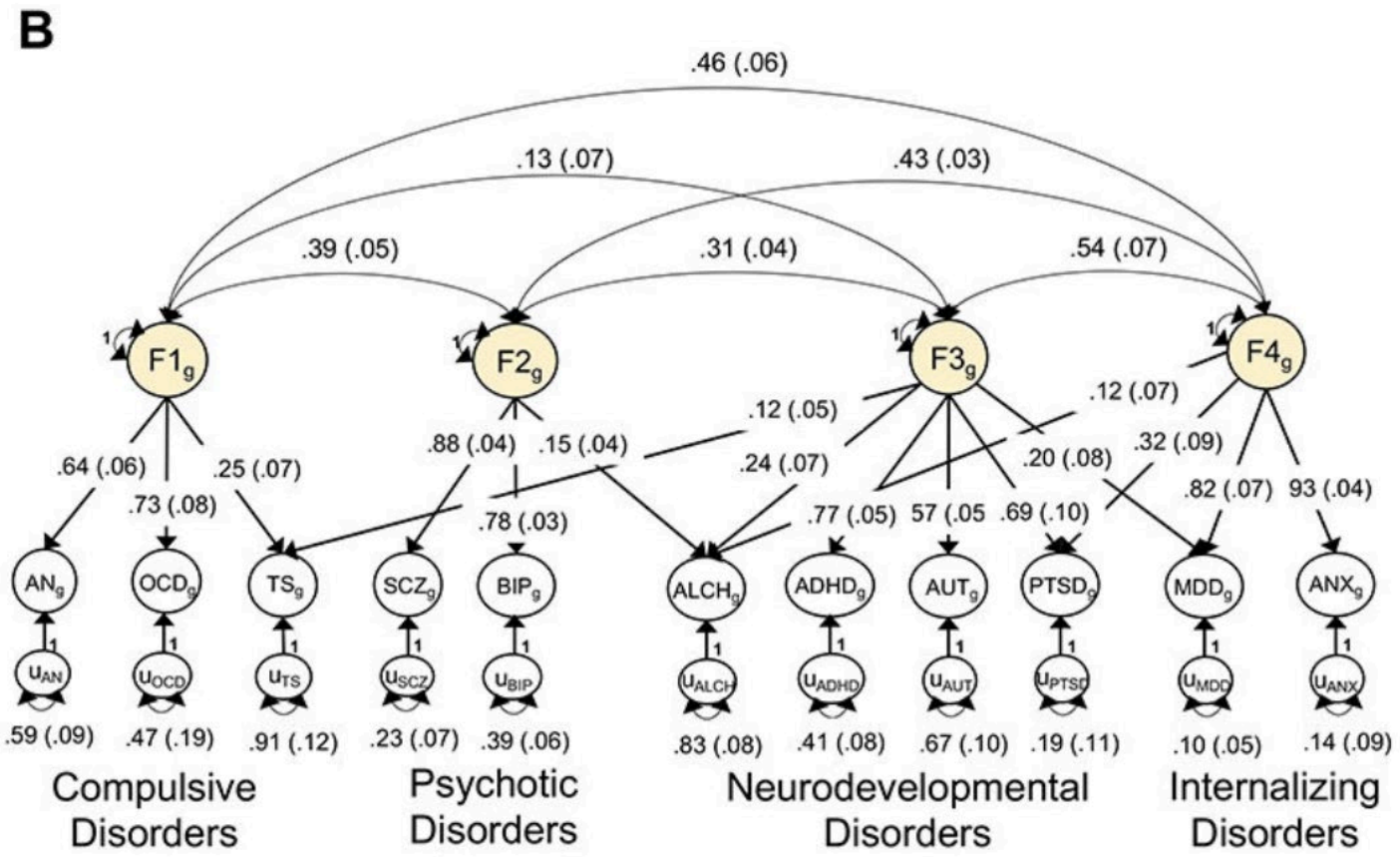
精神科における神経発達症の診療

- 精神疾患と併存症の概念図
- 神経発達症（発達障害）とは
- 神経発達症と不安、うつ

（演者作成）3

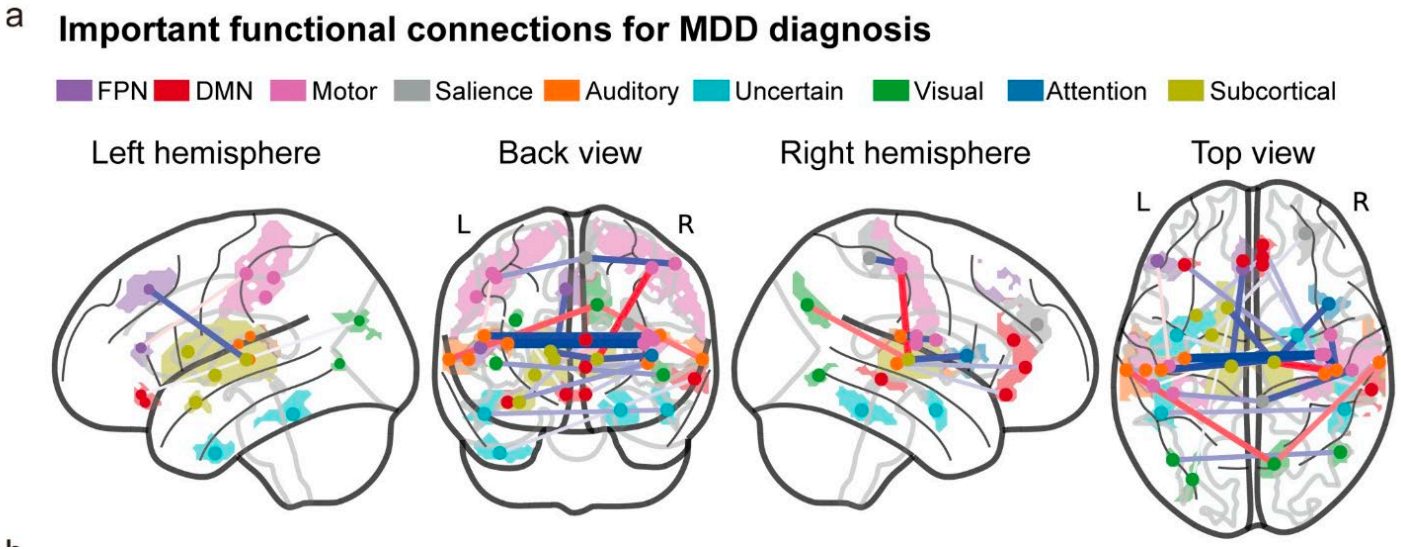
精神疾患と併存疾患の概念図

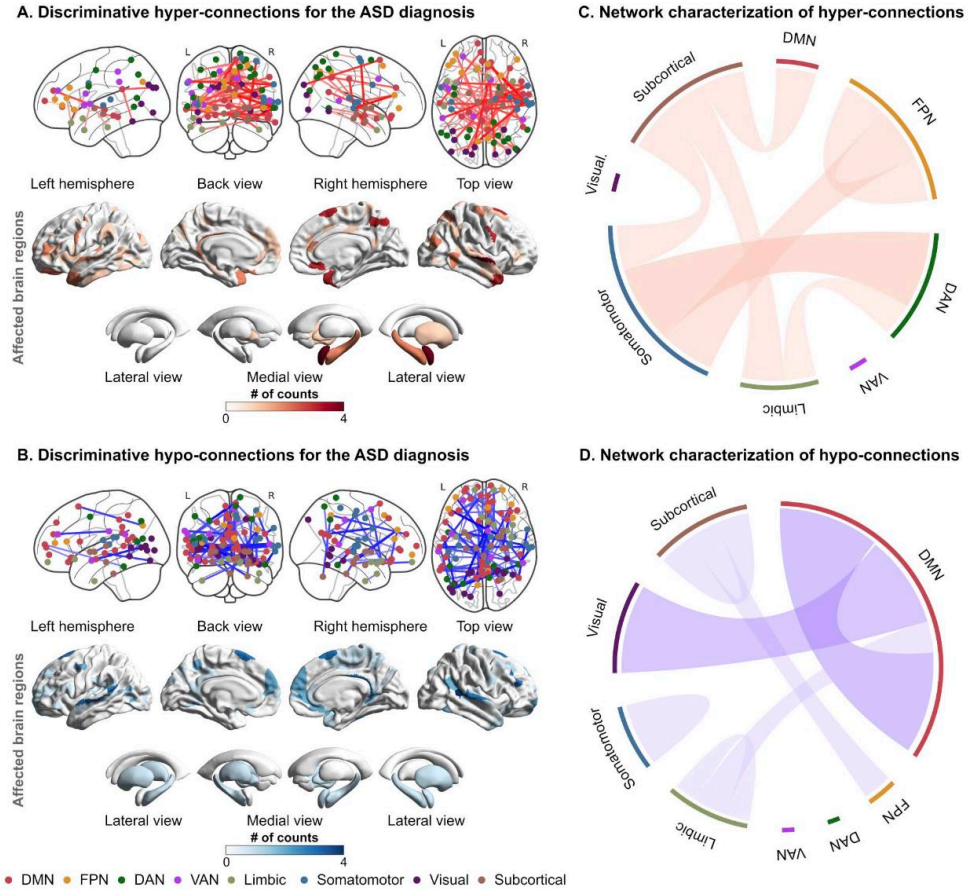
精神疾患の遺伝子研究 (Grotzinger, 2022)



- 精神疾患は遺伝性があるがメンデルの法則には従わない。
- GWAS、NGSの登場でゲノム解析の速度が飛躍的に向上した。
- 10万人を超えるサンプルサイズで同定されるような効果量の小さな遺伝子変異の集積が精神疾患を形成する。
- 遺伝子変異の関連性によって精神疾患はいくつかのクラスターに分類できる。

うつ病、自閉スペクトラム症の診断バイオマーカー (Yamashita, 2020; Itahashi, 2023)

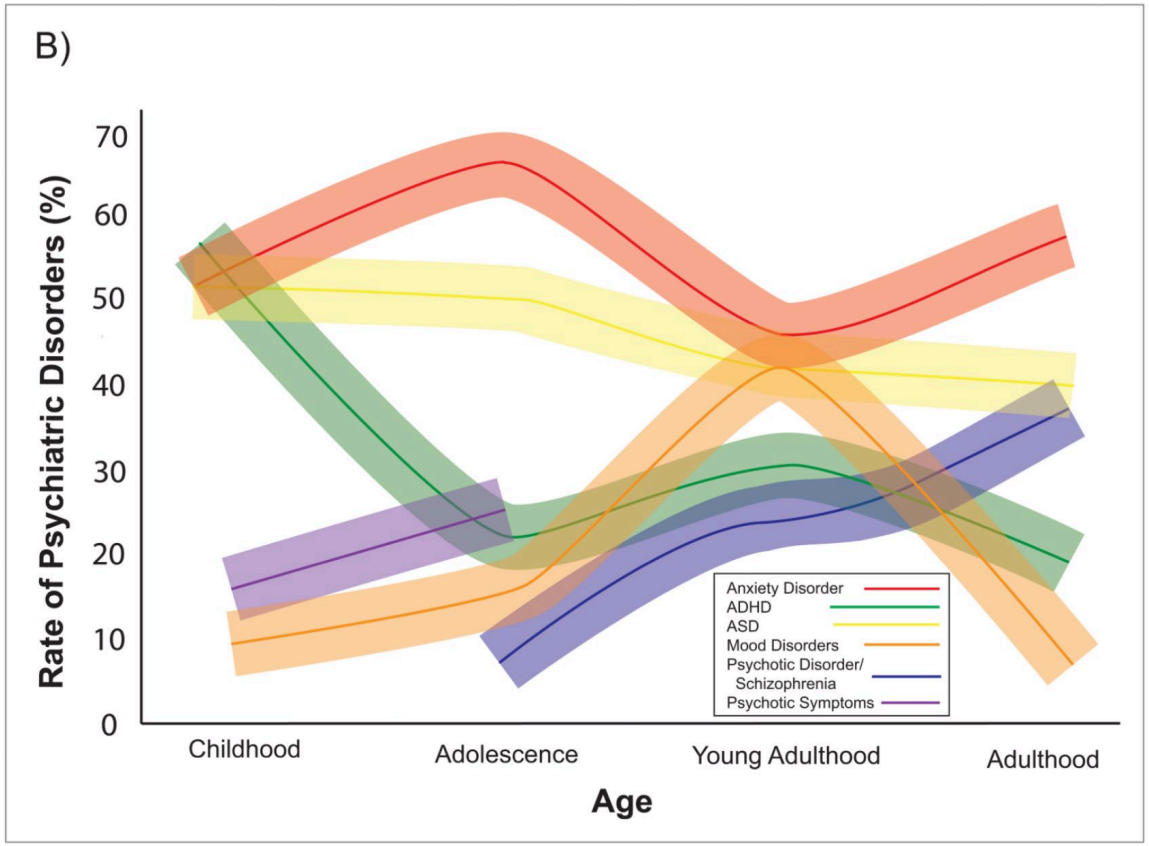




- うつ病、自閉スペクトラム症の安静時機能的MRI画像の診断バイオマーカーも説明係数の小さな機能的結合の異常の集積。

精神疾患は遺伝と環境の両方が影響する

(Jonas, 2014)



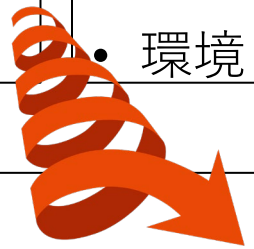
- DiGeorge症候群（22q11.2欠失）の患者はドパミン系の機能障害、前頭前皮質の機能障害を来すが、その結果の精神症状は生涯を通して変遷する。

精神疾患と併存症の概念図

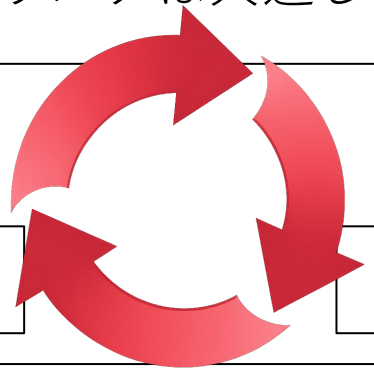
（演者作成）

個人の要因
- 分子レベルで効果量の小さな遺伝子変異の集積
- 神経回路や行動などの階層でも同じように効果量の小さな変異の集積

環境の要因
- 生育した家庭環境（養育者との関係）
- 各ライフステージにおける課題
- 環境における成功・失敗体験、外傷体験



発症のリスク
- 個人の要因と環境の要因が相互に影響しながら日々脳は変化する。
- 時にうつ病や併存症を発症するリスク（神経発達症特性やパーソナリティの特徴を含む）が形成され、発症する。うつ病と併存症のリスクは共通しているものもある。



うつ病　　併存症

うつ病と併存症、発症リスクは相互に悪影響を及ぼす

精神疾患の成り立ち

- 個人の要因と環境の要因が相互に影響しあいながら脳は成長し、人生が進行する。
- その過程で時にいくつかボタンを掛け違えると、不安やうつが暴走して精神疾患の状態になることがある。
- 細菌やウイルスが体内に入って肺炎を引き起こし、抗菌薬や免疫の力で病原菌を追い出し、感染症は治癒する。精神疾患はこのようなモデルで考えるべきものではない。
- 精神疾患を治すということは、自分のこころと身体の状態、自分の置かれた状況を適切に把握し、困難に際して適切に悩み乗り越えることができるようになること。

（演者作成）

精神科医の思考

- 現在の症状を把握し、操作的診断を同定する。
- 生育歴や環境要因について聴取し、これらについて話す本人の様子も観察しながら見立てを考える。
- 操作的診断のエビデンスに基づいた治療方針を考える。

例）パニック症に対する曝露法（認知行動療法の一手法）
　＋選択的セロトニン再取り込み阻害薬（抗うつ薬の一種）

- 見立てに基づいて患者のどの病態にどの治療を行うかを考え、患者と意思決定を共有し、治療に臨む。

※精神療法ができるのは、精神科だけ。
　公認心理師も医師の指示の下で治療を行う。

（演者作成）

神経発達症（発達障害）とは

神経発達症（発達障害）とは

- 脳の個性。消すべきものや治療すべきものではない。
- 「無くて七癖」という言葉の通りでみんな癖を持っているものだが、たまたま現代社会では生きづらい強すぎる癖をもって生まれたということ。
- 自閉スペクトラム症と注意欠如多動症に大別されるが、併存もよくある。
- 自分の癖をよく知り、その癖を使いこなして現代社会で生きていくことが大切。薬物療法は一部の症状を緩和するために使う。

（演者作成）

神経発達症（発達障害）とは

自閉スペクトラム症（ASD）の特徴

ADOS-2などで評価

- ✓社会的・情緒的な相互関係の障害
- ✓対人相互反応に用いられる非言語的コミュニケーション行動の障害
- ✓人間関係を発展させ、維持し、理解することの障害
- ✓その他、同一性への固執、限定された興味、感覚の過敏または鈍磨など

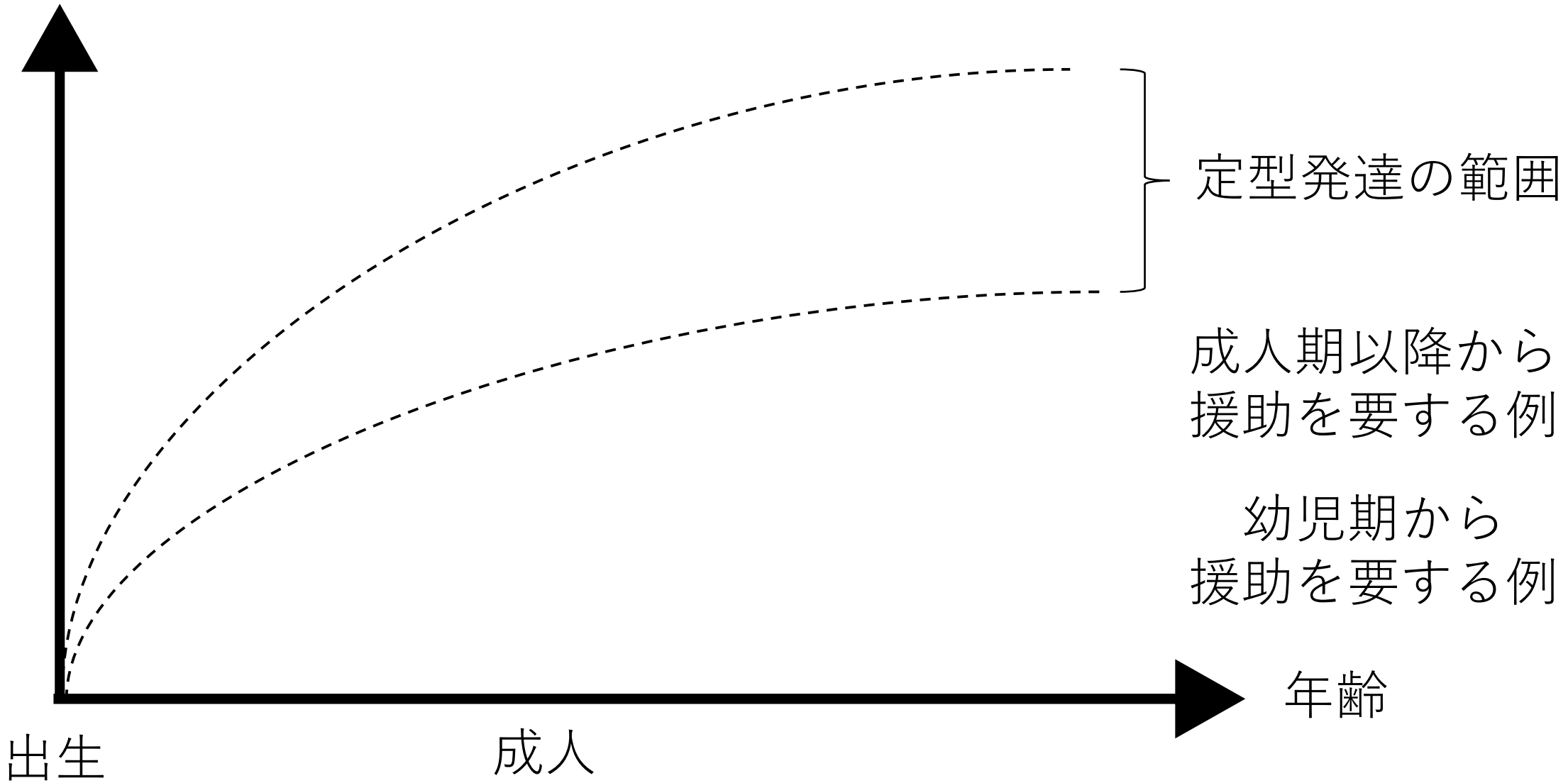
注意欠如多動症（ADHD）の特徴

CAADID / CAARSなどで評価

- ✓不注意---集中しているつもりでも漏れやミスがある
- ✓多動---あれこれ気が散りやすい
- ✓衝動---良くないなとうっすら思っていることでも、ついやってしまう

WAIS等の知能検査では神経発達症の診断はできない

社会適応に必要なスキル
（コミュニケーションや注意の制御など）



（演者作成）

よくある誤解
～知的発達症との関係～





- ASD、ADHDと知的発達症（知的障害）は別のもの。
- 自分の特性を使いこなして社会で活躍しているASD、ADHDの方はたくさんいる。一方で、知的能力が高くても特性を使いこなせないとうまく働けない。
- 軽度知的発達症は、重い障害。自立した就労は難しい。
  - 軽度知的発達症：日常生活動作はできて漢字の習得はできるが、就労には相当な支援が必要。
  - 中等度知的発達症：言語的な意思疎通が難しい。入浴や衣服の着脱などにも支援が必要。
  - 重度知的発達症：日常生活動作にも常時援助を要する。

（演者作成）

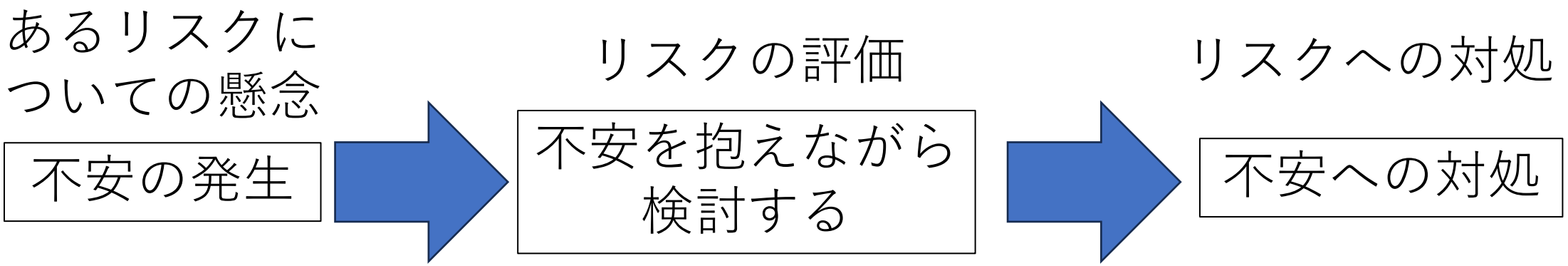
成人の神経発達症

- 学校等の環境に適応できるかは環境との相互作用で決まる。小児期から神経発達症特性があっても、問題にならないことがある。
- 人生が進行しながら、生きづらい神経発達症特性があることで様々なトラブルに出会い、傷つき、難しいパーソナリティになることもある。
- 成人してから出会う症例では、どこまでが神経発達症特性の問題なのか見極めることが難しいことも多々ある。
- ICD-9～ICD-11、DSM-Ⅲ～DSM-5-TRで疾患概念が変遷しており、今後も変化する可能性がある。
- 包括的にその人の生きづらさを理解する必要がある。

（演者作成）

神経発達症と不安、うつ

日常生活における不安



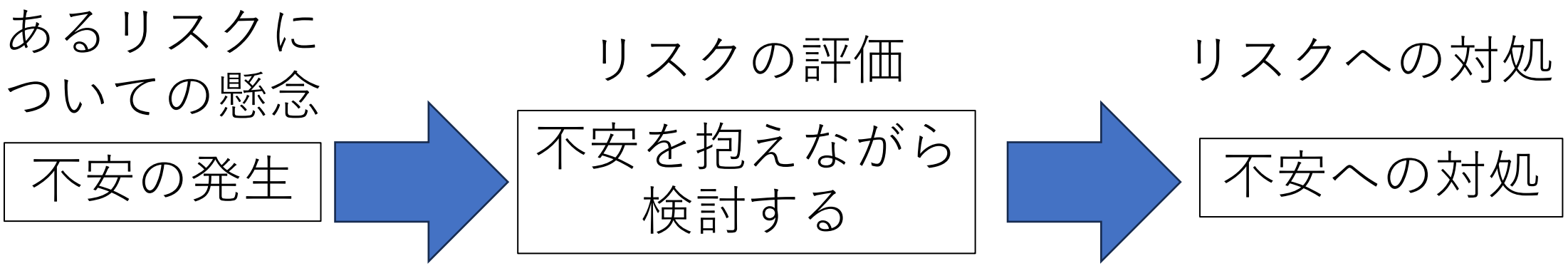
- 来週の講演がうまくいくか不安

- ○○の聴衆は××にうるさい
- でも、前任者のスライドはすでにもらっている

- 不安なので、しっかりスライドを準備しよう
- 今日できることはもうないのでまず寝よう

（演者作成）

不安への対処がうまくいかない例



- 状況の判断がうまくいかず不適切に不安を認識する。
- 刺激に過敏に反応して不安になりやすく、リスクの評価が追いつかず不安に圧倒される。
- 不安を抱えることができず衝動的な対処に走ることを繰り返してしまう。
- 不安に不適切な検討をして誤った対処をすることが精神症状につながる。

（演者作成）

不安と認知的コンポーネントの関係（演者作成）

- 状況の判断がうまくいかず不適切に不安を認識する
  - ワーキングメモリー
  - 視空間認知
  - 恐怖条件づけ

- 刺激に反応して不安になる頻度が高い
  - 注意機能（注意の選択、維持、精度）

- 不安に対する検討ができず衝動的に不適切な対処をする
  - 反応抑制

- 不安に対する検討が不適切で、不適切な対処をする
  - 逆転学習、目標指向性の計画

（演者作成）

強迫症の不安

不安の発生 → 不安を抱えながら検討する → 不安への対処

- ここで手を洗わないと病気になるのではないか
- ここで手を洗わない人もいる
- だけど、確率が低くても病気になる人もいる
- 手を洗っておこう（強迫行為）
- それに触るのはやめておこう（回避）

状況の認識が不適切

各種刺激に敏感
不安が発生しやすい

不適切な検討・対処が
刺激に対する恐れを強める
（不適応的な学習）

SSRI

認知再構成法

曝露反応妨害法

不安とうつの悪循環

こんな僕ではダメだ

- 自分で判断することが自信がない、不安
- 不安に飲み込まれていると、実際何か失敗をして落ち込む（うつ）

　あるいは、不安で何も行動できないまま状況がさらに悪化して落ち込む（うつ）

- こんな僕ではダメだ
- ますます、自分で判断することが自信がない、不安
- 不安に飲み込まれていると、実際何か失敗をして落ち込む（うつ）

　あるいは、不安で何も行動できないまま状況がさらに悪化して落ち込む（うつ）

- 繰り返す悪循環

（演者作成）

精神疾患と併存症の概念図

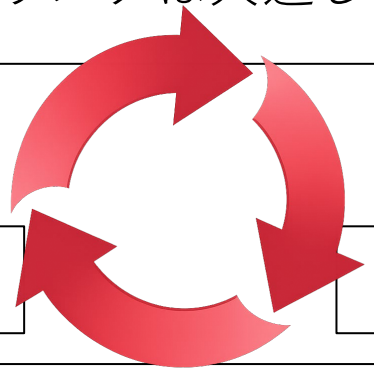
（演者作成）

個人の要因
- 分子レベルで効果量の小さな遺伝子変異の集積
- 神経回路や行動などの階層でも同じように効果量の小さな変異の集積

環境の要因
- 生育した家庭環境（養育者との関係）
- 各ライフステージにおける課題
- 環境における成功・失敗体験、外傷体験



発症のリスク
- 個人の要因と環境の要因が相互に影響しながら日々脳は変化する。
- 時にうつ病や併存症を発症するリスク（神経発達症特性やパーソナリティの特徴を含む）が形成され、発症する。うつ病と併存症のリスクは共通しているものもある。



うつ病　　併存症

うつ病と併存症、発症リスクは相互に悪影響を及ぼす

まとめ

- 神経発達症特性を含む個人の要因と環境の要因が相互に影響しあいながら脳は成長し、人生が進行する。
- その過程で時にいくつかボタンを掛け違えると、神経発達症特性が良くない方向に顕在化したり、そのことによるトラブルを経験しながら生きづらいパーソナリティになることもある。そういった要因によって不安やうつが暴走してうつ病、不安症などを発症する。神経発達症特性、パーソナリティと併存症が相互に悪影響を及ぼしながら複雑な臨床像になる。
- 自分の癖をよく知り、その癖を使いこなして現代社会で生きていくことが大切。精神科の診療ではこれを支援することになる。神経発達症に対する薬物療法は一部の症状を緩和するために使う。

（演者作成）